日本の公園の父

本多静六

小学生のみなさんへ

埼玉県には、さまざまな分野で活躍した多くの先人がいます。わが久喜市が生んだ偉大な人物〜本多静六〜もそのひとりです。

少年時代に父親を亡くした静六は、多くの困難とたたかいながら、つねに希望を失わず、並はずれた努力によってついに偉大な学者となり、日本のために大きな貢献をしました。

この本は、少しでも多くのみなさんに、本多静六のことをよく知っていただくことと、この本を通して、みなさんに将来への夢や希望を持っていただきたいと願ってつくりました。これからの学習に大いに役立ててください。

目　　次

1　本多静六ってどんな人？ …… 2

2　苦学から学んだこと（少年時代） …… 6

3　念願（ねんがん）かなったドイツ留学（23歳） …… 8

4　林学者としての功績（大学教授） …… 10

5　倹約家（けんやくか）、努力家としての静六の素顔（生き方） …… 12

6　「日本の公園の父」本多静六 …… 14

7　公園は「まちづくり」の中心施設 …… 16

8　日比谷公園と「首かけイチョウ」 …… 18

9　今も生長し続ける明治神宮の森 …… 20

10　都民の水がめ奥多摩水源林（おくたますいげんりん） …… 22

11　防雪原林（ぼうせつげんりん）を通じた野辺地町（のへじまち）との交流 …… 24

12　有名人との交流 …… 26

13　本多静六博士奨学金（しょうがくきん）制度の設立 …… 28

14　まわりの人々から見た博士の素顔 …… 30

15　本多静六博士が残した処世訓（しょせいくん） …… 32

16　市の顕彰（けんしょう）事業 …… 34

17　年譜 …… 36

18　成功するための12ヶ条 …… 38

1 本多静六ってどんな人？

✻河原井の折原家に生まれる

本多静六は、今から約150年前の慶応（けいおう）２年（1866）７月２日、当時の武蔵国（むさしのくに）埼玉郡河原井村（現在の久喜市菖蒲町河原井）の折原家に生まれました。

折原家は、代々村役人を務める裕福な農家でしたが、静六が９歳の時に父が急病で亡（な）くなり、貧しい生活を余儀（よぎ）なくされるようになりました。それでも静六は、家の仕事を一生懸命（いっしょうけんめい）手伝いながら勉強を続けました。

そして14歳になった時、祖父の許しを得て、東京の島村家へ書生（しょせい）として住み込むことになりました。

✻落第で心をいれかえ勉強に励（はげ）む

17歳の春、３年間にわたる東京での書生生活を終えた静六は、新しくできた東京山林学校に入学しました。しかし、入学した50人中50番目での合格だったこともあって、第１学期の数学の試験で落第してしまいました。貧しい生活の中から学費を出してくれた家の人に申し訳ないことをしてしまったと思った静六は、悲しみのどん底で眠れない夜をすごしました。

翌日、島村先生に落第の成績表を見ていただくと、「失敗は成功のもと、君が一心で立ち向かったなら問題あるまい。落第したことは私に話しただけで君の役目はもうすんだ。」と話し、目の前で成績表を紙くず箱に捨ててしまわれました。先生の思いがけない行為に静六は急に明るい気持ちになり、新たなる努力を決意し、このあと生まれ変わったように勉強に励みました。

✻努力すれば必ず成功できる

この頃静六は「エキス勉強法」という、要点をメモにまとめ暗記する学習方法を考え出しました。こうして一生懸命に勉強したかいがあって、今度は最優等生になることができ、学校から賞品として銀時計をいただくことができました。

このことがきっかけとなり、あまり勉強が得意でなくても、一生懸命勉強を続ければ、必ず成功できると固く信じ、一心不乱（ふらん）に勉強に励みました。

✻本多家への婿養子とドイツ留学

22歳の時、静六に婿養子の話が舞い込みました。相手は、元武士の家柄の娘で銓子といい、当時、日本で４人の女医の１人という才女でした。しかし、婿養子に気が進まない静六は、「ドイツに留学させていただけるならば」という条件を出して、結婚の話を断ろうとしました。当時、留学には想像もつかないほどたくさんのお金が必要だったからです。

しかし、本多家では静六をすっかり気に入り、留学の条件を受け入れることになり、結婚話もトントン拍子で進みました。

こうして、折原静六は本多家の婿養子となり、本多静六と名乗るようになりました。

✻25歳の時に人生計画を立てる

25歳にしてドイツのミュンヘン大学で博士号を取得した静六は、帰国後すぐに帝国大学農科大学（現在の東京大学農学部）の助教授となりました。

そのころ静六は自分の一生の生き方、すなわち「人生計画」を立てました。65歳までは一生懸命働くこと、そして66歳から85歳までは社会に奉仕すること、そして86歳から120歳までは老後を楽しく生きるというものでした。

また、人生計画とあわせて、毎日１ページ以上の原稿を書くことと、月給の「四分の一天引き貯金法」（給料から直接貯金すること）を実行することを決め、必死の思いでこれを実践しました。そのため月給の少なかった時代は、給料日前になると、ごま塩をおかずにご飯を食べたという話も残されています。

本多静六の人生計画表

期　名	年　齢	目　標	方　法
教練期	６～20歳	人間らしく働くための準備。	一生懸命に勉強する。苦手を克服し、貧しい生活にも耐える努力をする。
勤労期	21～65歳	自分自身のため、国のために働き、名誉と利益を蓄積する。	一度決めた職業が道楽となるくらいに努力する。貯蓄や倹約に励む。
奉仕期	66～85歳	名誉や利益とは無関係に、世のため、人のために働く。	後輩に役職を譲り、本人は名誉職、世話役となる。人の相談には親身に応じる。
老楽期	86～120歳	働きながら学び、趣味を楽しむ。	晴れた日は農作業に、雨の日は読書に励む。身の上相談、講演旅行等。

Q. 本多静六の妻になる銓子さんの結婚前の職業は何だったでしょうか。

✻日本最初の林学博士

明治32年(1899)、静六は32歳のとき、日本で最初の林学博士となりました。そして翌年には教授になり、評判通りの日本林学の第一人者として、林学の発展と指導者の育成に力をつくしました。

一方、静六は本職以外にも、林学を応用したさまざまな分野で活躍しました。

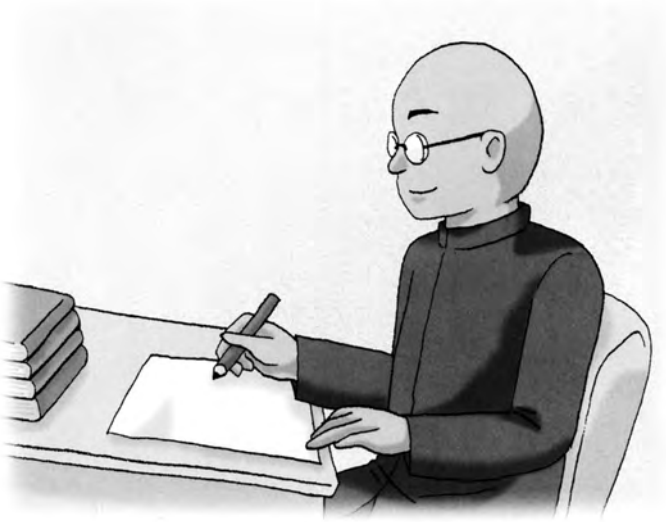
こうした努力の積み重ねにより、学生の頃からの念願だった海外への視察旅行も実に19回、その足跡は世界六大州にも及びました。当時は船旅での旅行でしたから、時間もお金もたくさんかかりました。

✻生涯に376冊の本を著す

静六は、大学教授のかたわら関係官庁、諸団体、民間会社など各方面の嘱託、顧問、委員、副会長、会長、相談役として活躍し、さまざまな業績を残しました。

さらに、私生活の問題についても、自ら体験して学んださまざまな経験を生かすことにより、気軽に身の上相談にも応じ、うまくこれを解決したことも決して見逃すことができません。

こうして、ついには林学、人生学などに関する大小376冊の本を書きました。



✻社会事業への寄附と簡素な生活

静六は、東京大学の教授を退職後、努力の結晶であった巨額の財産を、ひそかに社会事業に寄附したり、勉強をしたくてもできない人たちのための奨学金制度をつくったりし、老後は静岡県伊東市の別荘に移り住み簡素な生活を送りました。私生活の面では晩年に至るまで昼は畑仕事に精を出し、夜は勉学に励みました。食事も芋がゆやめん類を中心に、「ホルモン漬け」と称する新鮮な野菜の塩漬けを毎日食べていたので、とても健康で元気がありました。

そして退職後も本職の造林学、公園設計、観光施設などに対する研究も忘れず、招きに応じては全国各地に出かけて講演等を行いました。

子どもや孫たちとの団らんのひととき（写真左端が本多静六）

✻人生は努力、努力なしでは幸福にはなれない

このように静六は、あらゆる人生の困難に打ち勝って、学問に、実業に、調査研究旅行に、社交に、貯金に、家庭円満に、いずれも大成功を収めたのです。

静六は、長い生涯を通じて、「人生はすべて努力だ、努力なしでは英才にも幸福にもなれない。」ということを、身をもって示し、めったに現れない偉人として広く知られるまでになりました。

人生即努力（じんせいすなわちどりょく）
努力即幸福（どりょくすなわちこうふく）

日比谷公園（東京都千代田区）

✻日本の公園の父

静六は明治36年（1903）開園の日比谷公園の設計を最初に、約35年間にわたり、全国各地の公園設計を手がけました。その数は数百ともいわれています。また国立公園の創設にも力をつくしたことから、今では「日本の公園の父」と呼ばれるようになりました。静六が中心になってつくった明治神宮の森には、郷里（きょうり）の河原井からおくられたクスノキ（20ページに写真があります。）が今でも元気に育っています。

Q. 本多静六は、毎日のように食べていた野菜の塩漬けのことを何と言っていたでしょうか。

2 苦学から学んだこと(少年時代)

✻負けず嫌いと向学心、眠る時間は4、5時間

裕福な家に育った本多静六は、小さな頃は勉強嫌いの暴れん坊でしたが、学問好きな兄の影響もあって、年とともに勉強への関心をもつようになりました。

ところが9歳の時に父親が急死したことから、生活が一変し、貧しい生活が続くようになりました。そのため、勉強よりも家の手伝いが優先されました。

それでも静六の向学心は衰えることなく、とうとう14歳の年に兄の恩師である島村先生を頼って上京することになりました。ただし、この時の上京は、農繁期の半年は実家に帰って農作業を手伝うという、祖父の出した条件付きでの書生生活でした。そのため満足に勉強するゆとりもありませんでしたが、少しの時間を見つけては勉強に励みました。昼は四谷にあった塾で英語を学び、夜は島村先生から漢学を学びました。眠る時間は1日4、5時間でした。

✻島村家での書生生活

住み込みの書生生活は、毎朝早く起きて、まず雨戸を開け、戸や障子にはたきをかけて、座敷を掃除し、縁側一面にぞうきんがけをすることから始まりました。それが終わると玄関前や庭や門の内外までも掃くのですが、庭は広く山や池もあったので、秋の落ち葉の頃は特に大変でした。

島村先生には可愛がられましたが、勉強時間中になると、奥さんに用事を頼まれても「今

は勉強中ですから済(す)んでからやります」と、へ理屈(りくつ)をいうこともあったので、時々おやつをもらいそこねたこともありました。

来客があれば、客間に通して茶菓子(ちゃがし)を持っていく、食事の時にはお給仕(きゅうじ)もし、酒のおしゃくもするなど、お手伝いさんと同じ働きをしました。

上京当初、静六には東京の子どもはかしこく感じられました。静六はろくでもないことを言っては、近所の子ども達に笑われたり、目上の人に失礼なことをして恥(はじ)をかき、島村先生からもよく叱(しか)られたり、説教されたりしたものでした。

＊米つきをしながら読書にはげむ

農繁期(のうはんき)には家に帰り、農作業を手伝っていた静六ですが、仕事が多すぎて少しも勉強ができず困っていました。そこで祖父に頼み、１日の仕事の分量を決めてもらい、早くやった分だけは勉強時間にあてることにしました。

これで、その日の仕事が終われば、あとは自由に勉強ができました。しかし、昼間農作業を一生懸命(いっしょうけんめい)すると、夜は疲(つか)れて眠(ねむ)くなってしまいました。そこで、今度は働きながら勉強のできる仕事を選びました。

それは米つきでした。杵(きね)を押し上げるのに力が必要だったので、体重の軽かった静六には大変な仕事でしたが、こつを覚えれば、本を読みながらでもできるようになりました。しまいには、つい読書に夢中になってしまい、米を白くつきすぎることもしばしばでした。

Q. 読書をしながら手伝ったという、静六が一番に得意とした家の仕事は何でしょうか。

3 念願かなったドイツ留学（23歳）

＊日本初の林学博士を生む原点となったドイツ留学

一流の林学者を目指す本多静六にとって、当時最先端の技術を誇るドイツへの留学は念願でしたが、貧しい実家から仕送りをうける身には実現の難しい夢でした。

しかし、ちょうどその時に本多家から婿養子の話があり、本多家の経済支援により留学が実現することになりました。

ターラント高等山林学校での本多静六
（右から3人目、1890年5月）

明治23年（1890）３月23日、大学を卒業した静六は留学先のザクセン州ターラントに向けて横浜港を出航しました。38日間の航海を経て５月８日に留学先のターラント高等山林学校のあるターラントに到着しました。

＊「洋行日誌」に記された留学生活

ターラント高等山林学校時代、友人に頼まれて日本の服を着た時のもの（1890年5月）

静六はこの後約半年間にわたってターラントで留学生活を送り、その後はミュンヘン大学へ移りました。ターラントでの生活の様子は、彼が記した「洋行日誌」にくわしく書かれています。

ターラントには、静六が学んだ当時の学校や下宿屋がそのままの姿で残されていて、学校はドレスデン工科大学の校舎として現在も使われています。ターラントは今でもドイツ林学の最先端をゆく町として、世界中から注目を集めています。

留学時の静六は、養父や妻のために、少しでも多くのことを学び取ろうと、毎日夜遅くまで一生懸命に勉強に励みました。そのためドイツ人からは「本多くらい勉強をする者はいない。」とまで言われました。

本多静六が留学した当時のターラントの町並み。左の大きな建物が山林学校、右隣の３階建の家が下宿した建物。この町並みの風景は現在もほとんどかわっていない。

✻家の経済的理由で留学期間を半分に短縮（たんしゅく）

ターラントで半年過ごした後ミュンヘン大学に転校した静六は、さらに専門的な林学や経済学を学びました。しかしこの時、家の都合により送金が途絶（とだ）えることになり、４年間の留学予定を短縮しなければならなくなりました。

そのため静六は、今まで以上に生活費を切りつめながら勉強に励むとともに、難関といわれたドクトル（博士号（はくしごう））試験にわずか２年間の留学期間で挑戦（ちょうせん）することになりました。そこで静六はまず博士論文を提出し、厳しい審査に合格し、面接試験、演説討論試験に臨みました。途中何度もくじけそうになりましたが、日本に残してきた妻や養父、兄弟などのことを思い浮かべ懸命（けんめい）に努力を続けました。

✻ドクトル本多静六の誕生

懸命に勉強をした成果が認められ、静六はドイツ人でさえ４年以上の年月を要する試験に１年半で見事合格することができました。この時授（さず）けられた学位が「ドクトルエコノミー（経済学博士）」でした。静六はこの「ドクトル」という学位を一生の宝物とし、日本でも自分の名刺（めいし）に「ドクトル本多静六」と記したものでした。

このドイツでの留学経験が、のちの日本最初の林学博士を生む原点となりました。

本多静六が留学した当時の建物は、現在ドレスデン工科大学の校舎として使用されている。

Q. 本多静六が留学した学校は、何という名前の学校でしょうか。

4 林学者としての功績（大学教授）

✻明治の初めの頃の日本の「林学」

明治15年（1882）、東京の西ヶ原（現在の北区西ヶ原）に東京山林学校ができたのが、日本における「林学」の始まりともいえます。当時、林業は一般の人々には仙人のやる仕事ぐらいにしか考えられておらず、わずかに奈良県や三重県の一部で、林業経営が行われていたにすぎませんでした。

また林業関係の専門書も少なく、人々の関心の薄いこともあって、一部の地域では乱伐や焼畑農業などにより、山林の荒廃が進んでいました。山林の荒廃は山の保水力を弱めるため、洪水などの大災害を引き起こすことがしばしばありました。

こうしたことから、山林の保全と林業の育成を考えた明治新政府は林学に注目し、先進国ドイツの技術を取り入れようと専門家を招き、東京山林学校を開校させたのです。

✻日本林学の基礎を築いた本多静六

本多静六が入学した東京山林学校は、現在の東京大学農学部に引き継がれています。

明治23年（1890）に大学を卒業した静六は、その後２年間ドイツに留学し、さらに高度な林学を学び、日本に帰国後は「日本最初の林学博士」として日本林学の発展と普及、指導者の育成に力をつくしました。

また、静六は「林政学」「提要造林学」などの専門書58冊を著し、日本林学の基礎を築くとともに、日本で初めての「造園学」の講義を行うなど、明治・大正・昭和と長期間にわたって日本林学の先駆者として活躍しました。

本多静六が手がけた六甲山系再度山の植林

現在の六甲山系再度山
（現在は緑でおおわれているが、明治初期は荒れ果てていた）

植林が始まった明治36年（1903）の再度山

施行から１年後の再度山

大正2年（1913）施行から10年後の再度山

写真提供：神戸市森林整備事務所

✻大学演習林（えんしゅうりん）の創設と定年制度の実現

林学研究のための演習林の必要性を強く訴えた静六は、明治27年（1894）千葉県鴨川市清澄（きよすみ）に日本最初の大学演習林を創設しました。

また演習林からあがる材木売上金で、教員の退職金を支払うという方法を考え出し、長い間解決しなかった大学教授の定年制問題も解決することができました。

東京大学千葉演習林、造林実習での講義風景（大正14年（1925）8月）
写真提供：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林千葉演習林

✻国立公園の創設と全国各地の公園設計

本多静六が設計した公園の一つ、大宮公園
県内でも指おりの桜の名所となっている。
写真提供：埼玉県大宮公園事務所

山林の保護と人々の健康に深い関心をもっていた静六は、国立公園の創設にも力をつくしました。また、専門の「森林美学」を応用し、日本各地の公園の設計にも携（たずさ）わりました。中でも東京の日比谷公園や福岡の大濠（おおほり）公園、埼玉の大宮公園などは、都会のオアシスとして、多くの人々に親しまれています。

さらに静六は、公園設計を手がけるなかで、地域の経済発展策や観光振興策（しんこうさく）などにも積極的に取り組み、多くの業績（ぎょうせき）を残しました。

Q．本多静六が林学を学び始めたころの日本の山林はどのような状態だったでしょうか。

5 倹約家、努力家としての静六の素顔(生き方)

✻買ったつもりの「ツモリ貯金」

本多静六は倹約してお金を貯える方法として、「ツモリ貯金」というやり方を考えました。それは洋服や家具など欲しいものがあった時、気持ちのうえで買ったこと（買ったツモリ）にし、「品物は買ったが、すぐには使わないので一時店に預けた。」と考えて、その分のお金を貯金しておくというものでした。

つまり、その時は欲しいと思ったものでも、後で欲しくなくなったり、必要だと思ったものでも必要でなくなる場合があるので、すぐには買わずよく考えて、本当に必要なものだけを買うというやり方をしたのです。こうして貯まったお金で、必要があれば、いつでも、どんなものでも買うことができたといいます。

✻ものを大切に、倹約が成功への第一歩

誰でも自分のものは大切に使いますが、公共物や他人のものは無駄遣いしがちです。こうしたことから、静六はものを大切に扱うことを心がけ、学生たちにもそのように指導しました。

例えば大学の用紙を使う時には、余白のあるものや裏が白いものはみんな取って置いて、後で何かの下書きに使うようにしました。また自宅で書く文章の原案なども、たいていは古いノートの残りのページや広告ビラの裏面を利用したり、封筒も裏返して再利用したりしました。

水道水も大切にしました。例えば、入浴した状態でちょうどよい位置に印をつけて置き、風呂桶に水を入れ過ぎないようにしました。風呂桶も四角ではなく丸い形の桶を使い、他人にもすすめました。こうした倹約方法は、「人生成功のための第一歩」として雑誌や新聞などでも紹介されたといいます。

＊仕事は早め早めに片付け、時間を有効に使う

明日の予定の仕事でも、できれば今日のうちにというように、何事も早めに仕事を片付けることが静六の信条でした。

「今日は大丈夫でも、明日は何が起こるかわからない。」という理由からでしたが、ふだんから早め早めに仕事を片付け、次の仕事の準備を進めていた静六は、思いがけない事態が起きても、決してまごつくことなく、余裕をもって対処できたといいます。

乗り物の中でも時間を有効に利用しました。旅行中の列車や船の中では、寝だめか読書、または原稿書きをしたので、たとえ速度がゆっくりでも、決していらいらすることなく、気持ち良く時を過ごすことができたといいます。

そして出張先では、山林関係の仕事は天候に左右されることが多かったので、晴れの日は努めて多くの仕事を片付けてしまうようにしました。そして雨の日には、晴れの日にできなかった事務仕事を室内でするなどして、決して時間を無駄に使うことはしませんでした。

Q. 本多静六がふだんから行っていた倹約方法には、どのようなものがあったでしょうか。

6 「日本の公園の父」本多静六

—全国各地の公園設計、国立公園の創設にも尽力(じんりょく)—

✻大小数百の公園を設計

本多静六は、明治34年(1901)の日比谷公園の設計を最初に、明治・大正・昭和と約35年間にわたって、北は北海道から南は鹿児島県まで全国各地の公園の設計を手がけました。その数は、自ら書いた本の中で「大小合わせて数百」と言っています。

静六は、公園を設計するにあたって、自然環境や社会環境を綿密(めんみつ)に調べて、その土地の特徴(とくちょう)、人々の要望などを最大限に活かすように努(つと)めました。また、自ら設計した公園に好んで桜の木を植えたことから、今ある公園の中には桜の名所として知られているところが多くあります。

中部・北陸・東海地方

村杉温泉風景利用策(新潟県阿賀野市)、岐阜公園(岐阜県岐阜市)、養老公園(岐阜県養老町)、芦山公園(福井県越前市)、遊亀公園(山梨県甲府市)、舞鶴城公園(山梨県甲府市)、懐古園(長野県小諸市)、軽井沢遊園地(長野県軽井沢町)、臥竜公園(長野県須坂市)、山之内温泉風景利用策(長野県山ノ内町)、天竜峡風景利用策(長野県飯田市)、城山公園(長野県飯山市)、岡崎公園(愛知県岡崎市)、鶴舞公園(愛知県名古屋市)、清洲公園(愛知県清須市)、定光寺公園(愛知県瀬戸市)、日本ライン風景利用策(愛知県犬山市)、卯辰山公園(石川県金沢市)等

✻本多静六が設計(改良設計)に携わった全国各地の主な公園等

北海道・東北・関東地方

大沼国定公園(北海道七飯町)、春採公園(北海道釧路市)室蘭公園(北海道室蘭市)、鉄道防雪林(青森県野辺地町)、松島公園(宮城県松島町)、温海温泉改良私見(山形県鶴岡市)、鶴ヶ城公園(福島県会津若松市)、日光風景利用策(栃木県日光市)、偕楽園(茨城県水戸市)、伊香保温泉の新経営(群馬県渋川市)、敷島公園(群馬県前橋市)、飯能遊覧地(埼玉県飯能市)、森林公園と奥秩父(中津峡)(埼玉県秩父市)、羊山公園(埼玉県秩父市)、大宮公園(埼玉県さいたま市)、伊佐沼公園(埼玉県川越市)、清水公園(千葉県野田市)、奥多摩風景利用策(東京都奥多摩町)、南房総国定公園(千葉県鴨川市)、大磯公園(神奈川県大磯町)、箱根風景利用策(神奈川県箱根町)等

近畿・中国・四国・九州地方

和歌山城公園(和歌山県和歌山市)、大津森林公園(滋賀県大津市)、奈良公園(奈良県奈良市)、箕面公園(大阪府箕面市)、濱寺公園(大阪府堺市)、住吉公園(大阪府大阪市)、有馬温泉風景利用策(兵庫県神戸市)、城崎温泉改良策(兵庫県豊岡市)、城山公園(島根県松江市)、広島市の風景利用策(広島県広島市)、宮島公園(広島県廿日市市)、帝釈峡風景利用策(広島県庄原市)、岩国風景利用策(山口県岩国市)、日和山公園(山口県下関市)、徳島公園(徳島県徳島市)、清滝公園(福岡県北九州市)、帆柱公園(福岡県北九州市)、東公園・西公園(福岡県福岡市)、大濠公園(福岡県福岡市)、由布院温泉発展策(大分県由布市)、青島保護利用策(宮崎県宮崎市)、霧島公園(鹿児島県霧島市)等

大沼国定公園（北海道七飯町・大正 3 年（1914）に本多静六により改良設計された）
写真提供:七飯町商工観光課

✻国立公園の設置運動と協会の設立

欧米諸国の公園の実情を視察した静六は、山林の保護や人々の健康に役に立つ国立公園に早くから関心をもち、その普及と宣伝に努めていました。

こうしたなか静六は、かつて熊本市議会議員を務めた松村辰喜（阿蘇くじゅう国立公園創設の尽力者）からの強い願いを受けとめ、当時の担当大臣に対して、国立公園設置のためのはたらきかけを必死に続けていました。大臣もその考えには賛成でしたが、お金がないという理由で少しも話が進みませんでした。

そこで２人で立案した国立公園調査委員会の設立費用として、当時のお金で３万円（現在のお金で約3,000万円）を静六が出すことにし、そのお金を持って大臣の自宅を訪ねました。

そして事の次第を述べたところ、大臣はびっくりしましたが、やがて感激した口調で、「そうですか、あなた方がそれほどまでにご熱心なら、私としても改めて考え直さなければなりません。ただし、このお金は頂けません。ただこれだけで十分です。」と言って、お金の包み紙だけを懐に入れました。

こうした静六たちの努力のかいもあって昭和２年（1927）、国立公園協会が設立されることになりました。このとき協会の初代会長には旧熊本藩主の流れをくむ細川護立氏が就任し、副会長は静六が引き受けることになりました。

✻国立公園調査委員会設立

国立公園協会が設立されると、まもなく大臣の指名で国立公園調査委員会が設立されました。委員には、主に静六とその門下生が任命されました。

そして調査の候補地として、阿寒、大雪山、十和田、日光、富士箱根、中部山岳、吉野熊野、大山、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、霧島などが選び出され、昭和９年（1934）に瀬戸内海・雲仙・霧島など８か所が国立公園に指定されました。現在国内には35か所の国立公園があります。

Q. 本多静六は公園を設計するにあたって、どのようなことを心がけていたでしょうか。

7 公園は「まちづくり」の中心施設

✻公園を情報発信基地に

本多静六は、公園をまちづくりの中心施設と考えました。公園を地域の情報発信基地にすれば、人も集まりお金も動く、お金が動けば、地域経済も豊かになり文化の向上につながる、というまったく新しい考え方を生み出したのです。

こうしたことから静六は、公園の設計という枠にとどまることなく、日本各地の「まちづくり提言」も積極的に行いました。

✻由布院温泉発展策（大分県由布市）

大分県由布市は年間380万人の観光客が訪れる九州でも指おりの観光地です。一方、この市は魅力的なまちづくりを実践している市として全国的にも知られています。

静六はこの由布市（当時は由布院町）を大正13年(1924)に訪れ、「由布院温泉発展策」を発表しました。わずか２日間の滞在で、このまちの特徴を見抜き、全町公園化のための百年先を見通した具体的な発展策を提言したのです。

当時のことを想像する地元のある人は、「由布院を少しでもよくしたい…、と願う村人たちが本多博士を由布院へ招き講演をしてもらったのでは」と言っています。

さらに「しかし…、それら当時の村人たちの願いを、現在の私たちは実現していない。今からでも遅くない。本多博士のおっしゃられた『木を植えて森をつくる運動』を起こそうではないか。」とも語っています。

写真①由布院温泉のシンボル由布岳と大分川
②街中を走る馬車
③温泉が流れ込む景勝地、金鱗湖
写真提供：大分県由布市

✻村杉温泉発展策（新潟県阿賀野市）

新潟県阿賀野市にある村杉温泉を視察する本多静六（中央、大正８年）

大正８年（1919）、静六は新潟県阿賀野市（当時は笹岡村）を訪れ、村杉温泉の発展策を提言しました。村の特徴を活かしたまちづくり提案です。「多量の※ラジウムを含む温泉」、「広大な松林」、「清涼で豊富な水」、この３つの特徴を最大限に活かすための施設を設計書に書き込み発展策を完成させました。

この静六の提言の内容を知った村杉温泉旅館組合の青年部の人たちは、「今私たちが取り組もうとしていることが、70年も前に語られていたとは…」と驚きを隠せない様子でした。

結局、この時の提言は様々な事情により実現には至りませんでしたが、時を超えた今でも新鮮なまちづくり資料として地元の人々に引き継がれています。

✻奥秩父の発展策（埼玉県秩父市）

静六は埼玉県へ広大な山林を寄附するにあたり、奨学金制度の創設と秩父地域の発展をその条件としました。こうしたこともあって秩父市には県営「ふれあいの森」が整備されました。静六のことをよく知る人は、「村が発展してきたのは本多先生の功績が大きかった。先生への感謝の気持ちを忘れてはいけない。」と語っています。

村の自然をこよなく愛した静六は、この地をたびたび訪れ村の発展を願うと共に、村人とふれあう中で数々の逸話を残しています。

秩父市にある彩の国ふれあいの森、左は森林科学館、右の小さい建物は宿泊施設
写真提供：秩父市観光課

※ラジウム＝放射性元素の１つで、強い放射能を持つ。その放射線は医療にも利用されている。ラジウムを含む温泉はラジウム泉とよばれ、リウマチにきき目があるといわれている。

Q. 本多静六が埼玉県に山林を寄附するにあたり条件としたことは何でしょうか。

8 日比谷公園と「首かけイチョウ」

✻日比谷公園の誕生

日比谷公園は、明治21年(1888)に公布された「東京市区改正条令」に基づき計画されたものです。この条令は、欧米の都市を見習って、近代的な東京の町並みを整えることを目的としたものでした。そこで日比谷公園もこうした期待に応えるため、これまでの日本にない洋式公園として設計することが決まりました。

開園当時の面影を残す水飲み

雲形池と鶴の噴水

しかしその当時、日本には洋式の公園を設計する専門家は一人もいませんでした。市の顧問で、公園設計を任されていた建築家の辰野金吾博士が、頭を悩ませていたところを、たまたま本多静六が訪れました。

静六がドイツ留学経験から、西欧の公園の概要について少し意見を述べたところ、「それほど詳しいのなら、ぜひ君が設計をしたほうがよい。」ということになり、思いがけず公園の設計を引き受けることになりました。

こうして明治36年(1903)、静六の設計による日本初の洋式公園、日比谷公園が誕生したのです。

✻公園は公徳心を養う教育の場

設計書はできたものの、日本初の洋式公園ということもあって、市議会から様々な質問が出ました。「なぜ公園の門に扉をつけないのか、花を盗まれたらどうする。」と質問された時には、静六は「公園の花が盗まれない位に公徳心を発達させ、盗む気が起きない位にたくさんの花を植え、花があるのがあたり前の風景にします。」と答えました。また、「池をつくると身投げの名所になるのでは。」と質問された時には、「池の周囲に一間（約1.8m）ほどの浅瀬をつくり、岸から一気に飛び込めないようにします。」と答えたといいます。

✻本多博士と「首かけイチョウ」

公園造成中、公園前の道路の拡張が決定され、大銀杏が切り倒されることになりました。樹齢400年を超える大木が切り倒されると知った静六は、何とかしてこれを助けたいと思い、東京市参事会の議長に伐採の中止と、移植は自分が引き受けることを申し出ました。

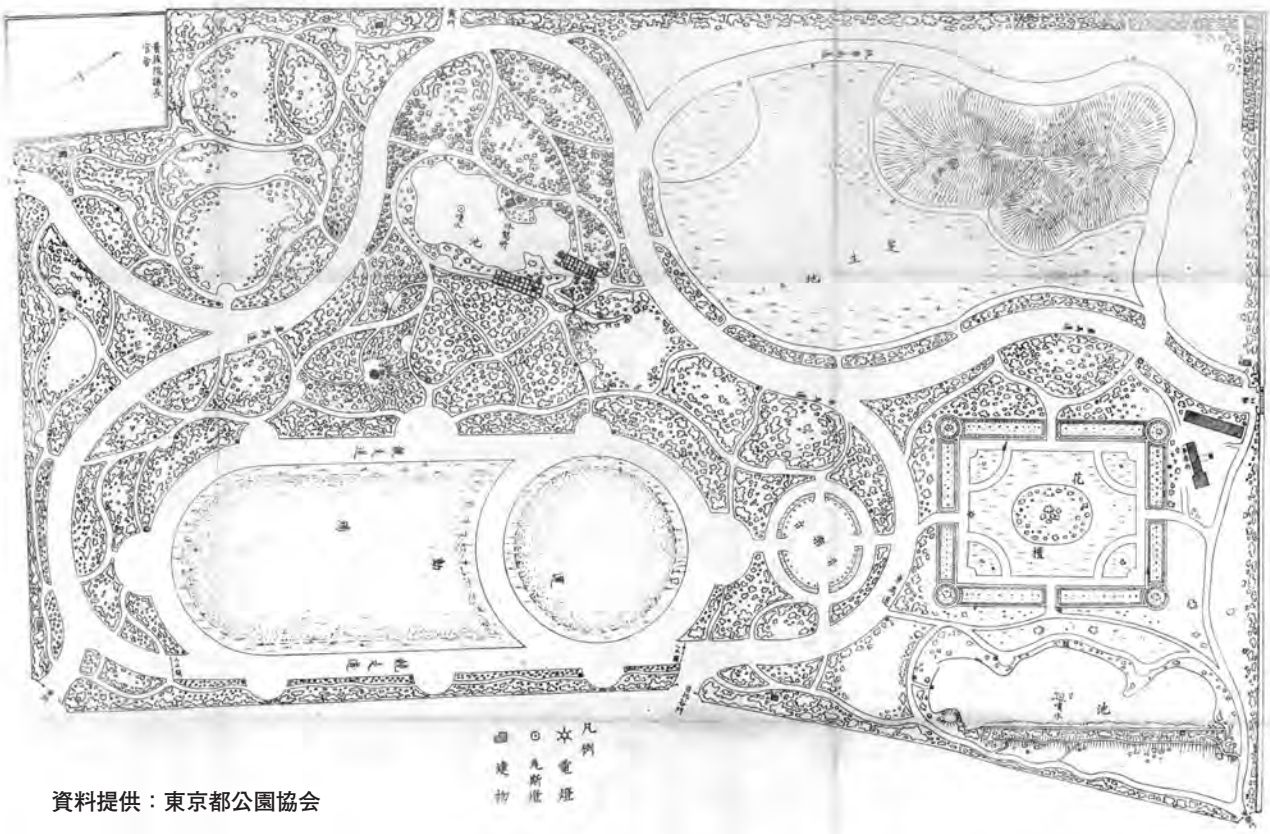
しかし、専門の植木職人でさえ移植は不可能とサジを投げたものを、いかに林学の専門家とはいえ、見込みがないと思った議長は、静六の申し入れを容易には承知しませんでした。そこで静六は「自分の首をかけても成功させる。」との決意を伝え、とうとう許可を取り付けました。

園内の中央にある一番大きな木「首かけイチョウ」
P18～19写真提供：日比谷公園サービスセンター

このようにして移植されたことから、この大銀杏は「首かけイチョウ」とよばれています。今でも公園で一番の大木として、園内の中央に立派な姿を見せています。

平成15年６月、日比谷公園は開園100周年を迎えました。日比谷公園は都会のオアシスとして多くの人々に憩いの場を提供し続けています。

創設当時の日比谷公園の設計図



資料提供：東京都公園協会

Q. どのような理由で本多静六が日比谷公園の設計をするようになったのでしょうか。

9 今も生長し続ける明治神宮の森

南参道一の鳥居。鳥居の右側にある木が菖蒲町河原井から運んだといわれているクスノキ
写真提供：明治神宮

✻100年先を見すえた森づくり

若者たちでにぎわうJR原宿駅のそばにある明治神宮は、令和２年11月に創建100周年を迎えました。都心にありながら、いったん鳥居（とりい）をくぐると森につつまれた静かな世界が広がります。広さ約70ha、17万本の境内林（けいだいりん）が、訪れる人を気持ち良く迎えてくれます。しかし、この森が100年も前に、100年後の完成を目標に人の手で造られたことはあまり知られていません。

明治神宮を造る計画が始まったのは、今から100年以上前の大正２年（1913）のことでした。明治天皇が亡（な）くなり、天皇をお祭りする社（やしろ）を造ろうという意見が出たのがきっかけでした。こうして政府は大正４年（1915）に明治神宮造営のためのスタッフを集めました。スタッフには、様々な分野から当時最高技術を持った学者たちが選ばれましたが、中でも本多静六は中心的な存在として活躍（かつやく）しました。

✻ドイツで学んだ「天然更新（てんねんこうしん）」を続ける森

静六たちが考えた森は、土地に適したシイやカシ、クスノキなどの常緑広葉樹を中心とした森でした。ところが、ここに思わぬ横やりが入りました。「神宮の森は杉などを使った荘厳（そうごん）な風景

はき集めた落ち葉は再び森へ戻される

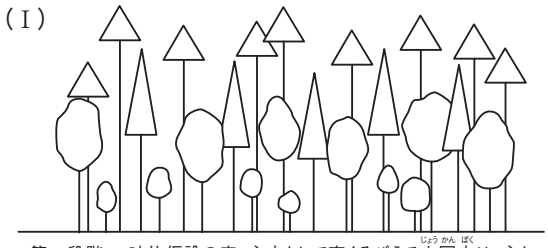
にするように。」との、当時の内閣総理大臣大隈重信からの一言でした。総理大臣の権力は絶大なものでした。

杉などの針葉樹は神宮の土地に適さないことを知っていた静六たちは困ってしまいました。そこで、たくさんのデータを用意して説得を繰り返し、どうにか納得してもらったのでした。

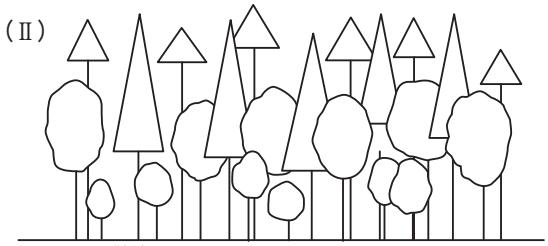
実は、静六が考えた広葉樹を中心とした森は、「天然更新」を続ける森だったのです。天然更新とは、人が新しく木を植えたり、種をまいたりしなくても、自然の力だけで木が世代交代をする永遠の森のことで、この方法は静六が留学先のドイツで学んだものでした。

明治神宮では、人の手を加えない「天然更新」の考え方が、今でも引き継がれています。そのため森の中で倒れた木はそのままに、通路の落ち葉も一枚たりとも外に捨てずに森に戻しています。

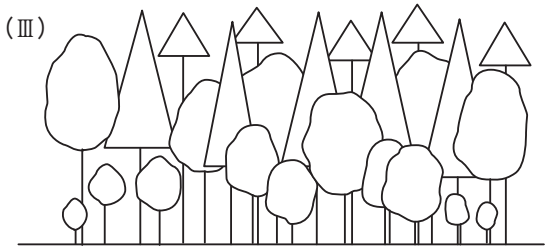
林苑ノ創設ヨリ最後ノ林相ニ至ルマデノ遷移ノ順序



第一段階:一時的仮設の森。主木として高くそびえる上冠木は、主として先駆樹種であるアカマツ、クロマツにする。その間に生長の早いヒノキ、サワラ、スギ、モミなどのやや低い針葉樹を交え、下層に、将来の主林木になるカシ、シイ、クスノキなどの常緑広葉樹、最下層に灌木類を植栽する。…(Ⅰ)



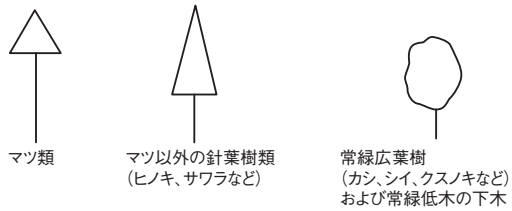
第二段階:林冠の最上部を占めていたマツ類は、ヒノキ、サワラなどに圧倒されて次第に枯れる。数十年後にはマツ類に代わってヒノキ、サワラなどの針葉樹が最上部を支配する。マツは点在する。…(Ⅱ)



第三段階:カシ、シイ、クスノキ類の常緑広葉樹が優位に立ち、支配木となる。その間に、スギ、ヒノキ、サワラ、モミなどが混じる。まれに、クロマツ、ケヤキ、ムクノキ、イチョウなどの大木を混生した状態。…(Ⅲ)

カシ、シイ、クスノキ類はさらに生長し、100年前後でカシ、シイ、クスノキ類の天然林相になる。…(Ⅳ)

(『明治神宮御境内林苑計画』より作図。)



(『大都会に造られた森ー明治神宮の森に学ぶー』32頁より)

✻生まれ故郷から運ばれたクスノキ

明治神宮の森の造営には、当初、全国から献上された約9万5千本の木が使われました。その中には静六の生まれ故郷、久喜市菖蒲町河原井から運ばれたクスノキもあります。

当時、久喜市菖蒲町河原井からの木の輸送には、大八車という人力の荷車が使われました。青年団の人たちが、大きなクスノキを荷車に載せて明治神宮まで歩いて運んだのです。神宮まであと少しという所で大きな坂にさしかかりました。この時疲れ果てていた青年団の人たちは、勢いをつけようとお酒を飲み始めました。飲んだ勢いで一気に坂を越えようと思ったのです。ところが疲れていたこともあって、つい飲み過ぎてその場で寝込んでしまい、とうとうその日は坂を越えられなかったという話が残っています。

翌日、クスノキは無事明治神宮に到着しました。このクスノキは今でも南参道の一の鳥居のそばに大きくそびえ立っています。

Q. 天然更新をし続ける森とはどのような森でしょうか。

10 都民の水がめ奥多摩水源林

✻水源林の保護を主張

見わたす限り植栽された東京都水源林
旧塩山市（現甲州市）二の瀬部落

東京都民の水がめとなっている多摩川上流の水源林は、今でこそ素晴らしい山林となっていますが、明治30年(1897)頃までは、乱伐と焼畑が繰り返され、荒れ果てた状態が続いていました。

こうしたことから本多静六は、奥多摩の水源林の保護と植林の必要性を強く訴えていました。この訴えを聞いた当時の※1東京府知事は、「あなたの忠告に感謝します。これは本来であれば東京市ですべきことでしょうが、市でやらないのであれば府でやります。やり方は全てあなたに任せます。」と答えました。こうして静六は、水源林の保護、造成という未経験の仕事を引き受けることになりました。

✻水源林の用地取得と経営面での大失敗

多摩川の最上流
P22～23写真提供：遠山　益 氏

静六は、まず水源林の伐採を制限し、同時に水源林の大部分を占める※2御料林の購入を計画して、交渉の末、安い値段で土地を買うことに成功しました。

こうして明治34年(1901)から水源林の造成という大事業が始まりました。しかし1,000メートルを超える高地での植林は、風雪害や冷害のため困難を極めました。

そして10年をかけてようやく水源林の経営が軌道に乗りかけた時、大問題が起こりました。突然、水源林の管理が東京府から東京市に移されることが決まり、急きょこれまで造林事業にかけたお金を清算しなければならなくなったのです。

経営が軌道に乗りかけたとは言え、これまでの植林の失敗や、林道などへの設備投資に思いのほか費用がかかったこと、さらに会計規則上問題な炭焼き職人への前払い金などがあったため、帳簿上に多額な損失金が生じてしまっていたのです。

※ 1東京府知事＝当時はまだ東京都になっていない。　※2御料林＝皇室がもっている山林のこと。

✻若い時の失敗は一生の薬

帳簿上の差額は約7,000円という、今では家が5軒くらい建つ大金でした。しかし、自らの監督責任を感じた静六は、そのお金を自分で払うことを決心しました。これを聞いた職員たちは感激し、みんなで少しずつお金を出し合って協力することにしました。こうして職員の出した残りの全額の4,800円を静六が負担して問題は無事に解決し、市に経営を引き継ぐことができました。

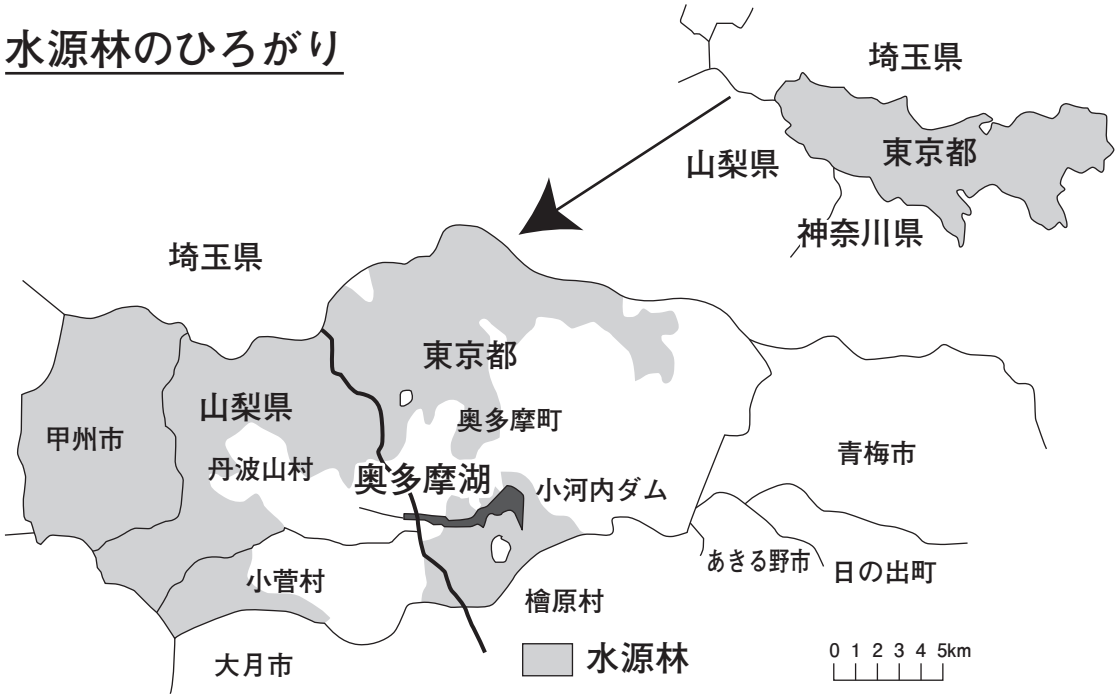
この話を聞いた養父本多晋は、「部下の失敗まで自ら責任をとり、これを公にせずに済まそうとしたのは、武士道にもかなうことだ。若い時の失敗は一生の薬にもなる。」といって、静六の行いを快く認めてくれました。

その後、静六は東京市の水源経営調査委員会から顧問に委嘱され、長く水源林の保護事業に携わりました。この時の静六の失敗や経験があってこそ、今日の奥多摩水源林があるといえます。

泉水谷（山梨県丹波山村）大沼沢のスギ保存林
（明治41年に本多静六らが苦労の末植えたもの）

本多静六が亡くなった後、東京都知事から贈られた表彰状

静六が苦心して造林した奥多摩水源林は、平成14年に創設100周年を迎えました。今でも都民の水がめの奥多摩湖を豊かな水で満たしています。



Q. 本多静六が造林する前の奥多摩の山林はどのような状態だったでしょうか。

11 防雪原林を通じた野辺地町との交流

本多静六の書による防雪原林の碑

野辺地防雪原林は昭和35年に鉄道記念物に指定された。

✻日本初の鉄道防雪林の誕生

東京と青森を結ぶ東北本線が明治24年(1891)に全線開通しました。しかし、青森県内では冬になると地吹雪のため、列車が立ち往生することがよく起こりました。木造の雪覆いや柵などを造りましたが、効果はいまひとつでした。そのため列車には、立ち往生に備えた非常食や体を温めるためのお酒のブランデーが積み込まれていたといいます。

こうしたなか明治25年(1892)、ドイツ留学の帰り道、カナダの鉄道防雪林を見学してきた本多静六は、帰国するとすぐ当時鉄道会社の重役であった渋沢栄一に「鉄道の防雪には森林をもってすることが、すべての面で最善です。」と提言し、直ちにこの案が採用されることになりました。

明治26年(1893)、こうして日本で初めての鉄道防雪林が、青森県野辺地駅構内に誕生しました。野辺地町にできた日本最初の防雪林ということで「野辺地防雪原林」とも呼ばれています。

山や海など豊かな自然に恵まれた野辺地町

✻ドイツで学んだ林学を防雪林の経営に活かす

野辺地町の防雪林と同じ頃、東北本線の水沢･青森駅間の41か所に、スギとカラマツが防雪林として植林されました。防雪林の効果は絶大で、その後瞬く間に全国に広まりました。

100年以上にわたり、野辺地駅を地吹雪から守ってきた防雪原林。幅400m、奥行きは約60m、約1,250本の杉が林立している。

明治41年(1908)、静六は防雪林の基本方針ともいえる「鉄道防雪林計画」を作成しました。防雪林の本来の目的は、鉄道を雪害から守ることでしたが、このとき静六はこの計画の中で、防雪林が経済的な事業としても成り立つよう考えました。成長して大きくなった木を伐採(ばっさい)し、木材として売って得たお金を植林などの費用に充(あ)てるようにしたのです。林学の先進国ドイツで学んできた学問を、さっそく防雪林経営に応用したのでした。この計画書は長い間にわたり、鉄道防雪林造成の教科書として受け継(つ)がれてきました。

✻鉄道防雪林を通じての友好都市交流

鉄道防雪林100周年記念式典のようす(平成５年10月13日)

野辺地町にある鉄道防雪林は、平成５年に創設100周年を迎(むか)え、これを記念した式典が野辺地町とJR東日本との共催(きょうさい)により行(おこ)なわれました。この時の式典に静六の出身地を代表し、旧菖蒲町の町長が来賓(らいひん)として招かれたことから、野辺地町との交流が始まりました。

平成９年には友好都市の協定が結ばれ、以来小学生の代表が毎年交互に訪問したり、お互いのまちのイベントに特産品をもって参加することが恒例(こうれい)行事となりました。野辺地町には、久喜市にはない海や山、スキー場などもあり、いろいろな面で有意義な交流事業が続いています。

Q. 本多静六は何をヒントに鉄道防雪林を造ったのでしょうか。

12 有名人との交流

本多静六は、日本の政財界の中心人物をはじめ数多くの文化人とも親交がありました。中でも後藤新平、渋沢栄一らとは生涯を通じての交友がありました。

✻後藤新平の智恵袋として活躍

静六がドイツのミュンヘン大学に留学していた明治23年(1890)のことです。後藤新平が内務省に在官のまま私費留学で入学してきました。この時から後藤との生涯にわたる交流が始まりました。

日本で林学を学んだ静六が、ドイツへ来て政治経済を学んだのと同じように、医学を学んだ後藤も政治経済を学ぶことになったのです。大学では、静六が先輩で、何かにつけ後藤の面倒をよくみました。

ある時、後藤は事件に巻き込まれ牢獄に投じられる身となってしまいました。静六は知人の北里柴三郎らとともにお金を集め、差し入れをしたりして、いろいろと慰めました。その後、後藤はついに政界で大成功をとげたのです。

大正12年(1923)の関東大震災により東京が壊滅的な被害を受けた時、後藤から静六に「きょう内閣で、僕が中心になって帝都復興計画をやることに決まったので、その原案を至急立ててもらいたい。」という電話がかかってきました。静六は、欧米で見てきた都市計画を参考に、さっそく東京復興案を作り、後藤の期待に応えました。

後 藤 新 平

写真提供：奥州市立後藤新平記念館

生年　安政4年(1857)
没年　昭和4年(1929)
政治家　岩手県奥州市水沢区生まれ

父は水沢藩(岩手県)の藩士。福島県須賀川医学校を卒業後、愛知県医学校(現在の名古屋大学医学部)の医師を経て、明治16年(1883)に現在の厚生労働省にあたる内務省衛生局に入りました。

明治31年(1898)に台湾総督府の民政長官(児玉源太郎総督の補佐役)として抜擢されると、盛岡出身の新渡戸稲造とともに気候にあった砂糖業を盛んにしました。明治39年(1906)初代南満州鉄道株式会社総裁になり、鉄道や港湾の整備などの都市づくりを進めました。その後、逓信大臣をはじめ、内務大臣・外務大臣や東京市長などを務め、日本の近代化に力をつくしました。大正12年(1923)関東大震災が起こると、大きな被害を受けた東京の復興を進めました。

このような偉大な業績は、今日も社会・経済・文化等の発展に役立っています。

✻渋沢栄一との交友－実業界入りをすすめられて－

埼玉県出身の大実業家、渋沢栄一は、合理的な公利公益主義者で、どんなことにも念には念を入れ、自分が関係した事業は最後まで責任をもち続け、自分は多少損をしても、みんながもうかればよいと考える人でした。しかし、理屈に合わないことや納得のいかないことには全く見向きもしませんでした。

渋沢と静六との交友は、埼玉県出身の苦学生のための寮を東京に造ろうと、静六たちが寄附のお願いにあがった時に始まりました。この時渋沢は、寄附の件は了承したものの、寮の管理運営などについて細かく説明を求めました。こうして「埼玉学生誘掖会」という宿舎が完成し、初代会頭に渋沢が、初代舎監に静六が就任しました。

以来、50年以上にわたって２人の交友関係は続きました。特に、静六が外国旅行から帰ると渋沢は、必ず夕食会を開いて欧米の土産話を聞くことを欠かさなかったといいます。静六と同郷の先輩であり、友人であったこの渋沢から「事業に対する着眼と実行力のある本多は、学者にしておくにはまったく惜しい人だ。」とよく言われて、何度も実業界入りをすすめられたといいます。

渋沢は、経済学の専門家よりも、畑違いの静六にいろいろと相談をもちかけるほど、大変深く信頼していたのです。

渋 沢 栄 一

資料提供：（公財）渋沢栄一記念財団渋沢史料館

生年　天保11年（1840）
没年　昭和６年（1931）
実業家　埼玉県深谷市生まれ

明治６年（1873）大蔵省退官後第一国立銀行をはじめ500社以上の企業の設立に関わるなど、実業界で指導的な役割を果たしました。また、「論語」を処世の基本理念とし、道徳経済合一主義を唱えました。さらに、青い目の人形の受け入れなどを通して日米親善に力をつくすなど、広く国際親善に努めたほか、福祉や教育の面でも多大な貢献をしました。

県内では、明治20年（1887）に日本煉瓦製造を深谷市に設立したほか、秩父セメント、秩父鉄道、武州銀行等の設立にも関与し、埼玉県の産業･教育界にも大きな足跡を残しています。

Q. 本多静六と渋沢栄一が交友関係を築くきっかけは何だったでしょうか。

13 本多静六博士奨学金制度の設立

秩父市にある中津川県有林

✻自分も何か人の役に立つことをしたい

大学教授となった本多静六は、ある程度生活に余裕ができると、自分と同じように、勉強したくてもお金がなくて苦労している学生のために、何か役に立つことはできないだろうかと考えていました。

ちょうどその頃、同郷の政財界の人たちから、後輩たちのための学生寮を造ろうという話が持ち上がり、静六も発起人に名を連ねることになりました。交通が今よりも不便だった当時は、埼玉県内から東京の学校へ通うことは大変だったのです。

学生寮の建設には、多額の費用が必要だったことから、同郷の大実業家である渋沢栄一に支援をお願いすることにしました。しかし、渋沢は、「本来そういうことをやるときには、主体となってやる人が、自らお金を出してから他の人にお願いをするべきである。自分でお金を出さずに他の人にお願いに来るというのは、初めから間違っている。」と言いました。このとき、静六は、すかさず腹巻に入れてきた自分の年収の三分の一にあたる大金を渋沢に差し出しました。それを見た渋沢は、静六の誠意を強く感じ、埼玉県出身の学生のための学生寮建設への支援を約束してくれました。

✻貯めたお金を山林や株に投資

静六は「四分の一天引き貯金法」で貯えたお金を元手に、ドイツ留学中にお世話になった恩師の教えに従い、積極的に山林や株への投資を始めました。当時の日本は戦争後の好景気で、土地や株がどんどん値上がりしていたのです。そのため、1ha、わずか４円で買った山林は、その土地に立っている木だけで７倍の値段になるなど、恩わぬ利益をあげることができたのでした。

✻1,900名を超える奨学金利用者

静六は育英基金の資金として、山林を経営して100万円のお金を作る計画をたてました。しかし、大学教授をしながら山林を経営することは想像以上に困難でした。そのため静六は、自分の所有する秩父市の山林約2,600haを条件付きで埼玉県に寄附することにしました。昭和５年(1930)のことでした。

静六の出した寄附の条件とは、奥秩父の景勝地の保全と林道などの整備、そして苦学生のための奨学金制度を設けることでした。埼玉県では、この思いがけない申し出に感謝し、寄附条件を受け入れ、県有林の管理条例を制定すると共に、育英基金を設置して山林からの収益金の積立を始めました。

こうして昭和28年(1953)には、「本多静六博士奨学資金貸与条例」も制定され、翌昭和29年から奨学金の貸し出しが始まりました。この「本多静六博士奨学金制度」は、これまでに2,000名を超える人々が利用しています。

※奨学金制度＝勉強を続けたい人のために公の機関がお金を出して助ける制度。

中津川県有林の案内板

埼玉県中津川県有林にある本多静六の山林寄附由来の記念碑

Q. 本多静六が奨学金制度をつくろうとしたきっかけは何だったでしょうか。

14 まわりの人々から見た博士の素顔

地元のお年寄りが語る本多静六博士

✻用件は「葉書（はがき）」で充分です

大正時代のことですが、三箇村（河原井村ほかが合併してできた村）では小学校を建設するにあたり、本多博士の自宅のある東京まで寄附（きふ）をお願いに行きました。博士は『はい、わかりました。』と言ってすぐに100円の寄附を約束してくれましたが、その際『寄附くらいのことで、わざわざ皆さんがここまでおいでになることはありません。用件を葉書に書いて送ってくだされば結構です。私には１銭（せん）５厘（りん）（当時の葉書の値段）で充分です。』とおっしゃいました。 郷里の人の苦労を思った博士の発言ですが、この他、消火ポンプの購（こう）入（にゅう）の時にも100円を寄附してくれたこともありました。

✻郷里に帰った時の本多博士

本多博士は河原井の実家に帰る時は、いつも村（むら）境（ざかい）の河原井橋まで車で来て、その後は歩いて村人たちとあいさつを交わしながら実家に向かいました。どんなに偉（えら）くなっても実家まで車で乗り付けるようなことはしませんでした。

明治33年（1900）三箇小学校校舎
落成記念に植えた寄植えの松

お弟子さんが語る恩師の姿

✻その日にできることは明日に延ばさない

例えばその晩仕事が残っていても、次の日用事がない場合、ほとんどの人が翌日（よくじつ）仕事をしようと思いますが、本多先生はいつも『今日できることは、なるべくその日のうちに仕事を片付けて、翌日に仕事を持ち越さないことです。そうすれば安心してよくねむれるし、結局は体にもよいのです。』と話されていました。

✻いかなる場合も懸命の努力を

私が学生、助手、門弟（もんてい）として、先生から受けた最大の教訓は、いかなる場合も懸命の努力をし、それを続ける意志の強さでした。

本多静六の生家（昭和18年頃）

✻本多先生は天才ではなく「努力の人」

本多先生は人並み以上の頭脳、体力と強い意志をお持ちでしたが、生まれつきの天才ではなかったと思います。本多先生は、『努力さえすれば、普通の人でもある程度の成功を収めることができる。』という模範を示してくださった方です。そういった点で、天才以上の影響を私たちに与えてくださいました。

お孫さん（故 本多健一先生）が語る祖父の素顔

大学教授時代の本多静六

✻努力がごちそうを生むことを身をもって経験

子どもの頃、祖父から『今日はごちそうしてやるぞ。』と言われ、ひたすら歩き廻されました。夕方、空腹で疲れ果てて家に戻った時、『どうだごちそうだろう。』と言って、出された食事が塩鮭の焼き物と漬物でした。それこそ、ほおが落ちるようなごちそうに感じられました。

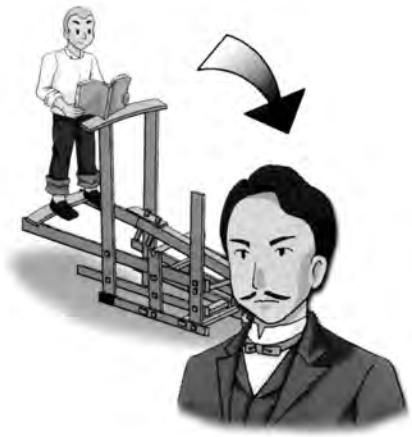
✻一日はあいさつではじまる

自分が大人になり、忘れることができない深い感動を受けたのは、生涯活動家であった祖父が朝の忙しい出勤時間前に家の中を急いで廻り、真っ先に曾祖父に、また家族の者に礼儀正しく朝のあいさつをされたことです。祖父が教えてくれたあいさつの大切さをしみじみと感じております。

Q. 本多静六が仕事をするうえで、ふだんから心がけていたことはなんでしょうか。

15 本多静六博士が残した処世訓

✻苦学の経験から生まれた世の中を生きぬく方法

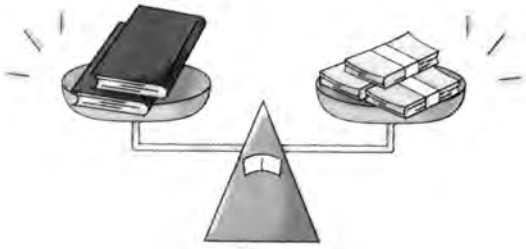


貧乏な学生から出世した本多静六

本多静六は、日本初の林学博士として、また日本の林学・造園学の基礎を築いた学者として有名でしたが、同時に「処世の達人」「資産家」「慈善事業家」としても広く知られていました。貧乏な学生から出世を遂げ、成功を収めた陰には、経験に基づいた静六ならではの生き方があったのです。それらについて書かれた『私の生活流儀』などの本は現在も出版が続けられ、今でも多くの人々の共感を呼んでいます。

✻経済の自立なくして自己の確立はない

「経済の自立なくして自己（精神）の確立はない。」この考えは静六がドイツ留学中に恩師から学んだものでした。独立した生活ができるだけの財産がないと、他人への遠慮から自分の信念を貫き通すことができず、結局は学問も大成しないという教えでした。



学問だけじゃなく、お金も大切！

こうしたことから静六はお金の大切さを改めて認識し、帰国後は給料の４分の１を常に貯金する方法（四分の一天引き貯金法）で元手を作り、積極的な財産の運用を心がけ、多額の資産を成すまでになりました。

仕事は一生懸命やると楽しいなぁ！

✻成功の秘訣は「職業の道楽化」

静六は成功への秘訣として、まず経済的に自立することが条件だとしていますが、さらにその心がまえとして「職業の道楽化」をあげています。これは「仕事に全力で取り組み、その勤めが愉快で面白くてたまらないという考え方」のことです。

どんな仕事でも最初の頃はきつく、つらいものです。しかし、一生懸命に努力を重ねていくことによって、いつしか楽しみを見出せるようになり、しまいには仕事が楽しくてたまらないという気持ちになるのです。

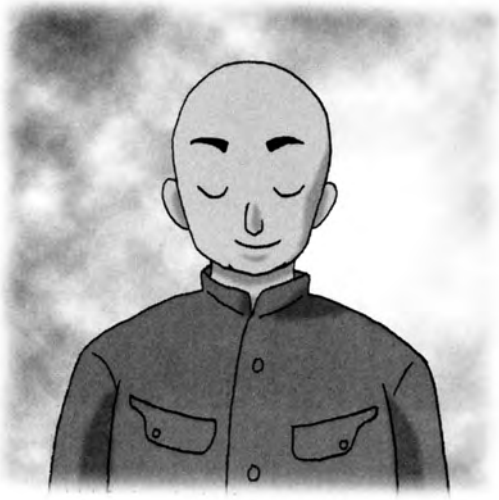
これが「職業の道楽化」という、静六の最も得意とした教訓の１つでした。

✻自分の運命は自分で開拓する

また、静六は精神面での工夫として、「見栄を捨て生活を合理化する。」という教訓を残しています。真に強い人間は、他人の厄介にならずに自分のことは自分でする人のことである。そのためには生活の中の無理・無駄を省き、自分に合った生活をし、さらに自分の運命は自分で開拓するという強い信念を持つことが必要だと言っています。

そして「機会(チャンス)は与えられるものではなく、自らの手でつかむもの。慢心（自分のことを心の中で自慢する気持ち）を押さえつつ、常に視野は広く保ち、大きな勇気を持ってチャンスを手に入れなさい。」とも言っています。

✻流れる水のごとく、たゆみなく生きよ



努力すれば必ず道は開ける！

自分に降り掛かってくる事柄全てを自然に受け入れ、問題解決に向け全力で努力する、それが静六の実践した生き方でした。どんな苦しいことにあっても、決して他人に頼ったり、社会や自分の運命を恨んだりはせず、ただ一つ、努力により困難を解決しようと試みました。

時代が移り変わり、周囲や状況がどう変わろうと、問題を解決し乗り越えるには自分の「努力」が何よりも大切だということが静六の処世訓の真髄と言えます。

Q. 本多静六は、自分の長い人生経験の中から、人の生き方のなかで何が一番大切だといっていますか。

16 市の顕彰事業

✻名誉市民の称号を贈る

旧菖蒲町では、本多静六の功績を称え、平成４年に名誉町民の称号を贈り、現久喜市でも名誉市民として継承し、引き続き顕彰事業に取り組んでいます。これは静六の業績を広く市内外に紹介すると共に、無理や無駄のない合理的な考え方をまちづくりに反映させることを目的としたものです。

✻「本多静六博士を顕彰する会」との協働

これまでに発行された本多静六関係の出版物

静六が名誉町民となったことをきっかけに、平成４年５月、「本多静六博士を記念する会」が町民有志により設立されました。記念する会では、静六の業績や人柄を紹介した「本多静六通信」の発行や「大日本老樹番附」の復刻などを行っています。

平成20年に「本多静六博士を顕彰する会」と改め、市の顕彰事業を協働して行っています。「本多静六通信」の内容は久喜市ホームページでも見ることができます。（https://www.city.kuki.lg.jp/）

✻生誕地記念園を整備

平成４年10月、静六の生誕地近くの旧国道122号沿いに「本多静六博士生誕地記念園」を整備しました。園内には静六の胸像をはじめ、日比谷公園の「首かけイチョウ」の接ぎ木があります。さらに平成９年３月には、静六が設計を手がけた全国の公園一覧記念碑も追加されました。この記念碑には、全国74か所の公園などの場所が記されています。

本多静六生誕地記念園　胸像の台座部分には、秩父市から寄贈された石が使われています。

✻没50年記念式典と講演会

平成14年７月、旧菖蒲町では「本多静六博士没50年」の記念式典を実施しました。アミーゴで開催された式典では、博士の母校にあたる三箇小学校児童による静六についてのスライド紹介や、静六のお孫さんにあたる故本多健一先生（東京大学名誉教授）の思い出話などが披露されました。そのほか静六の処世訓に詳しい渡部昇一先生（上智大学名誉教授）による記念講演会も行われました。また、記念式典にあわせて記念誌『日本林学界の巨星 本多静六の軌跡』の発行や「本多静六特別展」も実施され、テレビや新聞などでも大きく紹介されました。

博士のお孫さんにあたる故本多健一先生

✻「本多静六記念館」を開設

平成25年４月、菖蒲総合支所（現在の菖蒲行政センター）の５階に「本多静六記念館」を開設しました。記念館には、静六の胸像をはじめ、自筆のノート、衣類、著書などが展示され、静六の人柄や業績などを知ることができます。

また、展示品のほか、静六が手がけた公園等のうち、全国78か所が検索できるシステムや静六の一生を分かりやすくまとめた映像ガイダンスなど、電子機器を使ったコーナーも設けられています。

本多静六記念館

✻「本多静六博士顕彰事業基金」の設置

市では、静六の偉業を永く後世に伝えることを目的に、顕彰事業のための基金の積み立てを行っています。基金は、本多静六記念館の整備などに使われます。

✻本多静六博士「没70年記念写真集」発行

本多静六博士を顕彰する会では、令和５年度に、久喜市の協力を得て、静六が昭和27年１月29日に亡くなってから70年となる節目の年を記念した『本多静六博士没七十年記念写真集　人生即努力、努力即幸福』を発行しました。

17 年　譜

年　号	年齢	こ　と　が　ら
慶応２年（1866）	0	７月２日、河原井村（現久喜市菖蒲町河原井）の折原家に生まれる。
明治５年（1872）	6	学制公布にともない小学校（校舎は幸福寺本堂）に入学。
明治９年（1876）	9	父禄三郎（長左衛門）40歳にて死去。
明治13年（1880）	14	上京し、兄の恩師である島村泰先生の書生となる。
明治17年（1884）	17	島村泰先生の勧めにより東京山林学校に入学。
明治19年（1886）	20	東京山林学校が駒場農学校と合併し東京農林学校となる。
明治22年（1889）	22	元彰義隊の隊長、本多晋の娘･銓子と結婚し婿養子となる。
明治23年（1890）	23	東京農林学校を卒業しドイツへ自費留学。東京農林学校が帝国大学農科大学と改称。
明治25年（1892）	25	ミュンヘン大学にて経済学を学び、ドクトル･エコノミーの学位を取得。同年５月イギリス･アメリカ･カナダ等を視察のうえ帰国。
明治26年（1893）	26	帝国大学農科大学の助教授となる。 「四分の一天引き貯金法」と一日一頁の文章執筆を始める。 日本初の鉄道防雪林の創設に携わる。
明治27年（1894）	26	東京専門学校（現早稲田大学）の講師となる。
	27	静六の提案により初めて千葉県鴨川市に大学演習林ができる。
明治29年（1896）	30	山林調査のため台湾へ出張。帝国大学が東京帝国大学と改称。
明治32年（1899）	32	「日本森林植物帯論」で日本初の「林学博士」の学位を取得。
明治33年（1900）	33	東京帝国大学農科大学（現東京大学農学部）の教授となる。
明治34年（1901）	34	東京市日比谷公園設計調査委員となる。
明治35年（1902）	35	足尾銅山鉱毒調査会委員となる（内閣）。
明治36年（1903）	36	内国勧業博覧会の審査員となる。 日本最初の洋式公園である日比谷公園が完成する。
明治38年（1905）	38	長野県県有林の顧問となる。
明治39年（1906）	39	中国･韓国へ出張（内閣）。「四分の一天引き貯金」の成果により利子が基本給与を上回るようになる。
明治40年（1907）	40	欧米各国へ出張（内閣）。
明治41年（1908）	41	防雪防風林及び鉄道用林調査を嘱託される。
明治42年（1909）	42	鉱毒調査会委員となる（内閣）。 東京市水源経営調査委員会顧問となる。
明治43年（1910）	43	生産調査会の臨時委員となる（内閣）。
大正２年（1913）	46	マレー半島、ジャワ、スマトラ、ボルネオ等へ出張（内閣）。
大正３年（1914）	47	東京大正博覧会審査官となる（農商務省）。 高等官一等に叙任（内閣）。東京帝国大学評議員となる。

年　号	年齢	こ　と　が　ら
大正４年（1915）	48	大日本山林会理事に選任される。明治神宮造営局参与となる（内閣）。
大正７年（1918）	52	日本庭園協会理事長となる。
大正８年（1919）	53	帝国森林会の理事となり同副会長となる。
大正10年（1921）	55	欧米へ出張（文部省）。
		12月25日、妻銓子57歳にて死去。
大正11年（1922）	55	第17次の海外旅行に出張を命じられる（内閣）。
大正12年（1923）	56	神宮神域保護調査委員となる（宮内省）。
大正13年（1924）	58	恩賜公園の常設議員となる（東京市）。
大正15年（1926）	59	都市美協会の副会頭となる。帝国森林会の会長となる。
昭和２年（1927）	60	大学教授を退官（文部省、内閣）。正三位勲二等に叙任。
		東京帝国大学名誉教授の称号を授けられる。
昭和３年（1928）	61	日本庭園協会の会長となる。
昭和４年（1929）	62	国立公園協会の副会長となる（会長は細川護立）。
		東京震災記念事業協会の顧問となる（東京市）。
		渋谷町町議会議員に当選（一期４年勤務）。
昭和５年（1930）	63	国立公園調査会の委員となる（内閣）。
		埼玉県秩父郡大滝村（現秩父市）に所有の山林を埼玉県へ寄贈。
昭和６年（1931）	64	埼玉県人会副会長となる（会長は渋沢栄一）。
		大日本山林会名誉会員となる。農林審議会の臨時委員となる（内閣）。
		国立公園委員会の委員となる（内閣）。
		埼玉学生誘掖会及び埼玉学友会の会頭となる。
昭和７年（1932）	65	本多静六博士育英基金条例制定（埼玉県）。
昭和８年（1933）	66	栃木県名勝地経営調査委員となる。日本庭園学会の会長となる。
		千葉県立公園調査委員会の顧問となる。
昭和９年（1934）	67	満州国（現中国）の森林調査に出張。風景協会の副会長となる。
	68	神宮関係調査委員となる（内閣）。
昭和11年（1936）	69	都市美協会の名誉会員となる。
昭和12年（1937）	70	紀元二千六百年祝典評議委員会の委員となる（内閣）。
昭和13年（1938）	71	東照宮三百年祭記念調査会の委員長となる。
昭和14年（1939）	72	宮城外苑整備事業審議会の委員となる（東京都）。
昭和15年（1940）	73	大日本山林会の顧問となる。
昭和16年（1941）	74	貯蓄増強、生産合理化研究会の委員となる。
昭和17年（1942）	75	戦時貯蓄中央協議会の委員、東インド振興会顧問となる。
昭和18年（1943）	76	静岡県伊東町（現伊東市）内の歓光荘に転居する。
昭和22年（1947）	80	静岡県伊東町教育委員会の教育委員となる。
昭和24年（1949）	83	山林寄附の功績により記念碑を建てられる（埼玉県）。
昭和25年（1950）	84	伊東市特別市法審議会の委員となる。
昭和27年（1952）	85	１月29日、静岡県伊東市の国立療養所において死去。
		２月５日、港区青松寺において葬儀を行う。
昭和28年（1953）		本多静六博士奨学資金貸与条例が制定される（埼玉県）。

18 成功するための12ヶ条

本多静六は、自分の経験をもとに、人生を成功させる秘訣として下記の12ケ条を提案し、また自らも実践しました。

【その１　常に心を快活に保つ】

快活な人に会えば誰でも気持ちよく感じるが、暗い苦い顔をした陰気な人と接すれば、何となく不愉快になるものである。したがって心は常に快活でなければならない。

【その２　一度決めた職業を天職と信じる（仕事は成功する基）】

一度これと定めた上は、どこまでもそれを自分の天職と確信し、迷わず疑わず一生懸命その職業に励む。

【その３　自分の功は人に譲り、責は自分で負う】

人に功を譲るのは勤労の効果を貯えることであり、いつかは元金のほかに利息がついてかえってくる。

【その４　長所と交われば悪友なし（人づきあいの秘訣）】

いかに悪い人でもその全部が悪いものではなく、多少良いところ、優れたところがある。その悪いところには相手にならずに、良いところ、優れたところだけに友人となればよい。

【その５　左手で本業をおさえ、右手でチャンスをつかむ（積極的活動）】

専門以外のことを知る機会がある時は、その機をのがさずできるだけ多くを見聞し、調査し、要点を覚えておくとよい。

【その６　常に収入の四分の一を貯蓄をする（富を貯える基）】

経済の基礎は、何ものよりもまず勤倹貯蓄にある。

【その７　人事を尽くして時を待つ（安心の法）】

逆境の時、思うようにならない時は、しばらく時を待ち、その間に修養工夫して知識を養い、実力を貯える。

【その８　言動を慎み、反感を買うな】

思い上がりと言動を慎み、自分の身の左右にも用心してしっとをされないようにする。

【その９　学び続ける努力】

昼耕夜学ないし晴耕雨読、努めて労学併進の努力生活を楽しむべきである。

【その10　希望と自信を失うな】

暗い世間に明るい希望をいだけ。希望と自信を失う所に、失敗と不幸は忍び寄る。

【その11　施した恩はすぐに忘れ、受けた恩は長く忘れるな】

受けた恩を忘れないことは、やがてさらに恩に恵まれ大成功するもととなる。

【その12　名利（名誉と利益）は死後に期す】

成功者の特に慎むべきは名利であり、なるべく生前の名利を避けてこれを人に譲り、自分の死後ないしは百年先に名利を期すべきである。

むすびに

久喜市は昔から、すばらしい歴史と伝統のあるまちです。そこで生まれ育った本多静六。困難な時にも常に希望を失わず、自分の進む道を力強く歩み続け、偉大な功績を残しました。

みなさんも、この本を通して得たことをもとに、自分の夢と希望に向かって、歩き出してください。

〈参考文献〉

・「本多静六通信」（平成4年～（毎年度発行）・本多静六博士を顕彰する会）
・『本多静六博士没五十年記念誌　日本林学会の巨星　本多静六の軌跡』
（平成14年・本多静六博士顕彰事業実行委員会）
・『生誕百五十年記念誌　本多静六―森と公園を愛した人―』（平成29年・本多静六博士を顕彰する会）
・『本多静六博士没七十年記念写真集　人生即努力、努力即幸福』
（令和6年・本多静六博士を顕彰する会）
・『新版　本多静六自伝　体験八十五年』（平成28年・本多静六著・実業之日本社）
・『私の財産告白』（平成25年・本多静六著・実業之日本社）
・『私の生活流儀』（平成25年・本多静六著・実業之日本社）
・『人生計画の立て方』（平成25年・本多静六著・実業之日本社）
・『自分を生かす人生』（平成4年・本多静六著・三笠書房）
・『本多静六伝』（昭和32年・武田正三著・埼玉県立文化会館）
・『本多静六　日本の森を育てた人』（平成18年・遠山益著・実業之日本社）
・『日本の森林を育てた人　学習まんが　本多静六博士物語』
（平成27年・遠山益原作・監修、比古地朔弥まんが・埼玉県農林部森づくり課発行、埼玉新聞社制作）
・『もっと知りたい埼玉のひと　本多静六　緑豊かな社会づくりのパイオニア』
（平成30年・遠山益著・さきたま出版会）
・『本多静六　若者よ、人生に投資せよ』（令和4年・北康利著・実業之日本社）
・『日比谷公園学講座』（平成6年・東京都・（公財）東京都公園協会）
・『日比谷公園』（平成6年・前島康彦著・（公財）東京都公園協会）
・『大都会に造られた森―明治神宮の森に学ぶ―』（平成4年・松井光瑤他著・第一プランニングセンター）
・『林苑計画書』から読み解く明治神宮100年の森』
（令和2年・明治神宮とランドスケープ研究会著・上田裕文他編・（公財）東京都公園協会）

本多静六博士没60年記念事業
「日本の公園の父　本多静六」

○発 行 日：平成25年３月
○改 訂 日：令和７年１月
○編集発行：久喜市教育委員会文化振興課
〒340-0295　埼玉県久喜市鷲宮6丁目1-1
TEL0480-58-1111(代)　FAX0480-31-9550
○編集協力：本多静六博士を顕彰する会

本冊子は、平成16年３月に本多静六博士顕彰事業実行委員会により
編集されたものを改訂したものです。

日比谷公園之風景（大正６年）

提供：井口金男氏

日比谷公園の雲形池と鶴の噴水

この印刷物は古紙配合率70%再生紙と植物油インキを使用しています。

久喜市